

考える力を見る「図書館入試」

自己推薦の大学入試方式である「総合型選抜入試」（旧AO入試）の受験者数が近年、増えている。この入試方式の「お手本」と高校関係者などから称されるのが、お茶の水女子大学（東京都）の「新フンボルト入試」だ。学生が「チャレンジに値する力がつく経験」と語るユニークな入試を報告する。
（前田伸也）

総合型選抜は高校の推薦が不要で、志望理由書や小論文、面接、大学入学共通テストなどを組み合わせ、課外活動の実績や学習意欲などを総合的にみて選考する入試方式だ。出願は9月から始まるため「年内入試」とも呼ばれる。

文部科学省によると、2025年度入試は728大学2476学部が実施し、入学者数が12万6766人と過去5年ですべて10万人を超えた。4年前の21年度入試の約1.6倍だ。入学者の割合は全体の19.5%を占める。

大手予備校「早稲田塾」（東京



2次試験会場となる図書館を見学する受験生
＝2025年9月27日、お茶の水女子大学提供

お茶の水女子大の総合型選抜11年目

都）の執行役員中川敏和さんによると、高校に探究学習が導入されたことで、「総合型選抜との親和性を高め、受験へのハードルが低くなった」。受験のノウハウが一般化され、高校や塾で指導しやすくなったことが、受験者増につながっているとする。

一方で、文科省の調査では、選抜に関する業務時間の負担の大きさを、評価結果の点数化の難しさを課題にする大学は少なくない。学力試験に偏った配点をする大学への批判もある。

高校や推薦入試専門塾などから総合型選抜の「お手本のような存在」と目置かれる入試がある。それが、11年目を迎えるお茶の水女子大学の「新フンボルト入試」だ。大学はホームページで「風変わりな、しかし受験すること『何かをえられる』入試」と表現する。文系の「図書館入試」は特にユニークだ。

受験生は、9月に1次試験「プレゼミナール」を受ける。90分の講義2コマを受講し、60分で小論文を書く。合格者は10月の2次試験に進み、大学の図書館で6時間かけて、当日公表されるテーマの小論文執筆に臨む。翌日はグループ討論と面接がある。

大学の入試推進室長を務める大森正博教授は「課題を調べてまとめ上げるだけの十分な時間として設定している。時間が短いと受験生の本当の力を見ることができない。『やりきった』という思いで受験を終えてほしいのが大学側の願い」と語る。

26年度入試は募集人員12人に対し、志願者数は110人。倍率が

20万冊蔵書から6時間かけ小論文 倍率10倍狭き門

約10倍と狭き門だった。この年度の小論文テーマは「『模倣』とは、どのような行為でしょうか。自由に論じて下さい」。

昼食やおやつを食べる時間以外は、書庫を含む20万冊以上の蔵書から資料を選び、大学が用意するパソコンでインターネット検索して2千文字の小論文を仕上げる。

教育改革・入試改革担当の曹基哲理事・副学長は、その狙いを「高校までは問いに対して答えるスタイルで学びが進むが、大学に入った後は自ら問いを立てる学問になる。順番に答えていくペーパーテストでは得られない、どの順番でどのように答えるかを考える能力を見る入試」と語る。

新フンボルト入試を経て文教育学部に入学者に聞いた。

宮城県の高立高校出身で、人間社会科学科1年の学生（19）は、通っていた高校に4回にわたって6時間こもり、図書館入試に備えた。「高校3年間に積み重ねてきた活動を全部評価される。チャレンジすることに値する、力がつく入試で、貴重な経験になった」と振り返る。

YouTubeで大学の講義動画をみて1次試験の練習をしたという埼玉県立高校出身で言語文化学科の1年生（18）は「その場でインプットしてアウトプットする力が測られる入試と分析する。『これまでどんなに努力して知識を得たとしても、その場で自分で咀嚼して自分の言葉で書けなかったら完成できない』と難しさを語った。